



Data

監督・製作・音楽: クリント・イーストウッド
出演: アンジェリーナ・ジョリー / ガトリン・グリフィス / ジョン・マルコヴィッチ / コルム・フィオール / デヴォン・コンティ / ジェフリー・ドノヴァン / マイケル・ケリー / ジェyson・バトラー・ハーナー / エイミー・ライアン / ジェフリー・ピアソン / エディ・オルダーソン

👁️👁️ みどころ

時代は1928年。舞台はロサンゼルス。テーマは息子への母親の愛だが、80年前の実話がなぜ最高の女優、最高の監督のコラボによって映画に？失踪、発見、別人という導入部を経て、権力、悪夢、事件という軸の中で描かれる、ロス市の腐敗と闘い続けるヒロインの姿は感動的！オバマ新大統領による「CHANGE」の始動にも注目だが、アンジェリーナ・ジョリーの主演女優賞レースにも注目！



このタイトルは？

『チェンジリング』というタイトルを聞いても普通の日本人は何のことかサッパリわからず、何もイメージすることができないはず。これは「取り換えられた子供」という意味らしい。そして、この言葉の背景には、「さらった子供の代わりに妖精が置いていく醜い子供」という伝説が宿らしいが、知らなかったナア・・・。

取り換えられた子供は、9歳の男の子ウォルター・コリンズ(ガトリン・グリフィス)そしてその母親がシングルマザーのクリスティン・コリンズだ。時代と舞台は1928年のロサンゼルス。その頃中国では、中国東北地方への進出に躍起となっていた日本帝国主義に対する人民の抵抗が盛り上がり、1927年には第1次南京事件が発生した。つまり、孤立主義をとったアメリカはまだ平和を満喫している1928年だが、日本的には1931年9月18日の柳条湖事件(満州事変)につながる、きな臭いにおいのする時代だ。

クリスティンは電話会社に勤め、多くの電話交換手たちを管理する仕事をしているが、1928年のアメリカは恐慌前夜の時代であるうえ、クリスティンはシングルマザーだが

ら決してその生活は楽ではないはず。しかし、彼女が住んでいる郊外の一戸建ては結構な広さで、当時の日本人の生活レベルから考えれば社長サンのような暮らし。

それはともかく、映画の冒頭そんな2人の堅実な暮らしぶりが描かれるが、なぜ「チェンジリング」のターゲットがウォルター少年に・・・？

女優は？監督は？

142分という大作の全編にわたって奮闘するシングルマザーのクリスティンを演ずるのはアンジェリーナ・ジョリー。『トゥームレイダー』(01年)、『トゥームレイダー2』(03年)、『ウォンテッド』(08年)などでは豊富な肉体美とハードなアクションが目立つ女優。しかし彼女は決してそれだけではなく、『テイキング・ライブス』(04年)、『グッド・シェパード』(06年)、『マイティ・ハート/愛と絆』(07年)などの社会問題提起作にも出演し、大人の女性としてしっかりした演技を見せている。そんなキャリアが実り、彼女は遂にハリウッド・リポーター誌による2008年の女優出演料ランキングで1位(1本あたり1500万ドル、約14億円)となったうえ、この映画でゴールデン・グローブ賞主演女優賞にノミネートされることに。

他方、この映画の監督は、『許されざる者』(92年)と『ミリオンダラー・ベイビー』(04年)で2度のアカデミー賞監督賞を受賞したクリント・イーストウッド。市役所の地下から掘り出されたというクリスティン・コリンズの物語に興味を示した、ジャーナリスト出身の脚本家である「マイケル・ストラジンスキーが執筆した「衝撃的な事実に基づくストーリー」を読んで、クリント・イーストウッドは即座に監督を引き受けたい。そりゃ、これだけ綿密に調査された面白い史実にもとづく物語なら、料理のしがいもあるというもの。

さあ、現在のハリウッドの最高の女優と最高の監督のコラボによって実現した映画の出来映えは？

前半のストーリーの軸は「失踪」「発見」「別人」

この映画前半のストーリーの軸は、「失踪」「発見」「別人」の3つ。クリスティンの愛する9歳の一人息子ウォルターが突然失踪したのは1928年3月10日。映画を観に行く約束をしていた休日にもかかわらず、同僚の頼みを聞いて渋々出勤したクリスティンが急いで帰ってくると、家の中にウォルターがいない。ひょっとして誘拐されたのでは？と心配したクリスティンは警察に電話したが、警察は「24時間は動かない。きっと帰ってきますよ」とつれない返事。まずここに、ロサンゼルス市警のいり加減さが暗示されるが、実はそれがこの映画の大きなポイント。

24時間後の捜査が遅かったからかどうかは別として、その後、家出が誘拐の判断もつかないままウォルターの行方は杳として知れなかった。

ところがそれから5カ月後、ロサンゼルス市警青少年課のJ・J・ジョーンズ警部（ジェフリー・ドノヴァン）から、ウォルターがイリノイ州で発見されたという連絡が入ったから、クリスティンは大喜び。しかし、ロサンゼルス市警本部長のジェームズ・E・デイヴィス（コルム・フィオール）の肝入りで、駅では母と息子の対面のセレモニーが準備され多くの新聞記者が集まった。ところが、列車から降り立った少年をみて、クリスティンは「ウォルターじゃない！」と直感。つまり「ママ、ママ」と駆け寄ってきたこの少年（デヴォン・コンティ）は、ウォルターとは全くの別人だったわけだ。しかし、警察の功績をマスコミにアピールすることしか頭のないジョーンズ警部は頑としてそんな事実を認めようとしないうえ、少年もクリスティンに対してなぜか「ママ、ママ」と呼び続けたが、違うものは違う！

映画前半は、「失踪」「発見」「別人」をキーワードとするそんなミステリーめいた展開の中、クリスティンの戸惑いと自己のミスを認めようとしないうえロサンゼルス市警の腐敗ぶりが浮かびあがってくることに。

後半のストーリーの軸 その1「権力」

失踪、発見、別人という前半のストーリーの軸は、いわばこの映画の導入部。それに対し後半のストーリーの軸その1は「権力」。もちろん、ストーリー全体のウエイトは圧倒的に後半にある。まず直接目の前にみえる権力とは、クリスティンの前に立ちただかるジョーンズ警部の横暴ぶりだが、実はその背後にあるデイヴィス署長とクライアー市長との癒着した権力構造が大問題。

権力が腐敗する運命にあるのは古今東西の真理だが、1928年当時のロサンゼルス市警では政治権力と警察権力が癒着することによって腐敗、汚職、インチキが蔓延していたようだ。そんな「権力」にとっては、せっかくウォルターをみつつけてやったのに、「人違いだ。ホンモノのウォルターを捜して」と要求し続けるクリスティンの存在が目の上のたんこぶになったのは当然。さあ、そこで権力はどんな動きを・・・？

去る12月11日産経新聞は「中国の学者や弁護士、新聞記者ら303人が、人権の保障や民主化、共産党の一元独裁体制の終結を求めて署名した『08憲章』と題する声明が10日、インターネット上で発表された」ことを報じた。これは世界人権宣言採択から60周年に合わせたものだが、実名で一元独裁を批判するのは中国では極めて異例。さらに12月16日付産経新聞はその署名が3500人超になったと報じたから、その成り行きが注目される。つまり、再び1989年の天安門事件の悪夢がよみがえるのかどうかということだが、1928年当時のロサンゼルス市で起きた悪夢とは？

後半のストーリーの軸 その2「悪夢」

「08憲章」の「仕掛人」とみられる中国の著名な反体制作家劉曉波氏（53歳）は直

ちに拘束されたいが、この映画後半のストーリーの軸その2の「悪夢」とは、クリスティンが精神病院に収容されること。警察が逮捕するには逮捕状が必要だが、精神病院に入院させるにはどんな手続きが必要？まず考えられるのは医師の診断書だが、仮に警察の言うがままの診断書を書く医師がいるとしたら・・・？

当時のロサンゼルス市にはそんな医師があり、そんな病院があったらしいから大変。しかもクリスティンが強制的に入院させられたのは、ラジオ番組や教会での説教を通じてロス市警の腐敗摘発キャンペーン運動を強力に展開している長老教会の牧師グスタヴ・ブリーグレブ（ジョン・マルコヴィッチ）のラジオ番組に、クリスティンが出演する直前。日本でも、検察の裏金つまり調査活動費問題を告発していた元大阪高検公安部長であった三井環氏がテレビ出演直前の朝、突然逮捕されるという事件が起きたが、クリスティンの強制入院はいわばそのロサンゼルス版だ。

しかもクリスティンと同じ入院患者のキャロル・デクスター（エイミー・ライアン）の言葉によると、病院内にはクリスティンと同じように警察の逆鱗にふれたことが原因で入院させられている患者がたくさんいるというから驚き。人違いだという主張を撤回する書類にサインすれば、すぐに退院させてやると医師から言われたが、さてクリスティンは・・・？

後半のストーリーの軸 その3「事件」

ウォルターはなぜいなくなったの？そして、一体どこにいるの？それがこの映画が始まってすぐに提起される問題点だが、後半のストーリーの軸その3は「事件」。少年たちの誘拐犯として指名手配されていたゴードン・ノースコット（ジェイソン・バトラー・ハーナー）の行方を追っていたレスター・ヤバラ刑事（マイケル・ケリー）が、たまたまゴードンの農場で逮捕した少年から聞いたのは、驚くべき真相。つまり、ゴードンの従弟だというこのサンフォード・クラーク少年（エディ・オルダーソン）は、ゴードンに命じられて約20名の少年の誘拐とその殺人を手伝ったというわけだ。そんな恐ろしい告白を聞いたヤバラ刑事が捜索願いの出ている少年の写真を見せると、少年は次々と殺害した少年の写真を抜き出していった。そして、その中にはウォルターの写真も……。もちろん、殺人事件の立件のためには物的証拠が必要。そこでヤバラ刑事がゴードンの農場に行きクラーク少年に死体を埋めたという場所を掘らせてみると、そこには無残な少年たちの遺体が。

こうなれば、さすがにロサンゼルス市警も発見したウォルター少年が人違いだったと認めざるをえなかったが、そこで起きる疑問はなぜ彼はウォルターだと名乗ったのか？ということ。しかし、腐敗しきったロサンゼルス市警にとってはそんな真相解明はどうでもよく、今は人違いの判断に固執したジョーンズ警部を切ることによって、ロサンゼルス市警全体の体面を保つことだけ。もちろん、警察の権威を保つためには、ゴードンの逮捕も至上の命題だが……。

聴聞会は？裁判は？

クリスティンが精神病院を退院することができたのは、ブリーグレイブ牧師の強力な支援があったため。そんなブリーグレイブ牧師の腐敗摘発運動は、裁判所の命令によって精神病院から入院患者を全員退院させるという大きな成果にも結びついた。他方、ウォルターの死亡は悲しいニュースだったが、ロス市警の人違い処理とそのミスを認めないやり方に非難が集中したのは当然。つまり、クリスティンがかねがね主張していたように、ロス市警が早期に人違いを認め、早くホンモノのウォルターを捜索していれば、ウォルターがもっと早く生きて発見されたかもしれないということだ。

ここに至って潮目は完全に転換し、クライアー市長とデイヴィス署長をトップにした政治権力と警察権力の癒着・腐敗ぶりが裁かれる局面に。そこで注目されるのが、悪の温床となっていたロス市警刷新のための聴聞会とゴードンの刑事裁判の行方。まず聴聞会でジョーンズ警部へ非難が集中したのは当然だが、焦点はそれを許容していたデイヴィス署長やクライアー市長の責任問題まで追求が及ぶのかどうかということ。他方、ゴードンの刑事裁判では有罪＝死刑の判決が出ることはまずまちがいないところだが、ウォルター殺しを含む20名の少年の殺害の真相がどこまで明らかになるのが焦点。そんな2つの焦点とクリスティンの弁護士となったハーン弁護士（ジェフリー・ピアソン）の辣腕ぶりに注目しながら、その展開と顛末はあなた自身の目でしっかりと。

主演女優賞ノミネートの熱演とは？

この映画でアンジェリーナ・ジョリーは2009年の第66回ゴールデン・グローブ賞ドラマ部門主演女優賞にノミネートされた。それはもちろん彼女の熱演が評価されたためだが、その熱演とは、ジョーンズ警部への徹底的な抗議や精神病院での抵抗そしてロス市警の腐敗を暴くためブリーグレイブ牧師やハーン弁護士とともに活動を続けていく彼女の姿。もっとも、それだけの熱演なら必ずしも主演女優賞モノとは言えない可能性もあるが、主演女優賞にノミネートされた熱演の真の意味は、あくまでウォルターの生存を信じて前向きに行動していくクリスティンの姿。

クラーク少年の告白によってウォルターはゴードンに殺されたらしいことは明らかだが、クラーク少年もウォルターが殺される姿を直接目撃したわけではない。また動かぬ証拠として、ウォルターの遺体が発見されたわけでもない。もちろん総合的かつ客観的に考えれば、ハーン弁護士やブリーグレイブ牧師が言うようにウォルターは殺されたと見るべきだが、そう考えず死体が発見されない限りウォルターは生きてると信じるのがクリスティン流解釈。そして、それが母親の息子への究極の愛の姿……。ウォルターの死亡を確認するためのもう1つの有力な証拠は、裁判におけるゴードンの自白だが、実はそれもあいまいだ。

さらに、この映画がウォルターの生死不明問題を面白くしているのは、死刑と2年後のその執行という判決を下されたゴードンが、1930年10月30日の死刑執行の直前、クリスティンに対して「会いたい」「全てを話す」と連絡してきたこと。それによって、死刑執行の前日、ゴードンと面会したクリスティンだったが、なぜかそこでゴードンは「本当に来るとは思わなかった」「話なんかしたくない」とかたくなに説明を拒否。これに対して、クリスティンは再三「Did you kill my son?」と絶叫しながら質問したが、結局ゴードンはそれに答えないうまま13階段を昇ることに。

さあ、ウォルターはホントにゴードンの手によって殺されたのだろうか？いや、そんなことはない！あくまでウォルターの生存を信じる母親、アンジェリーナ・ジョリーの熱演に注目！

それから5年後、新たな展開が

この手の映画はどこがラストかの判断が難しい。私はストーリーはここで終わりとして早とちりしてしまっただが、クリント・イーストウッド監督は「それから5年後1935年2月27日」という最後のショートストーリーで、さらにクリスティンの息子への想いの強さを描いていく。

映画中盤のクリスティンの「パートナー」は、ブリーグレイブ牧師、ハーン弁護士、ヤバラ刑事たちだったが、最後のショートストーリーにおけるクリスティンの「パートナー」は、精神病院で生き抜く知恵を授けてくれたキャロル。ここでの面白い演出は、1935年という時代を浮かびあがらせるため、昔からの職場で働いている映画好きのクリスティンが、今年のアカデミー賞作品賞が『或る夜の出来事』かそれとも『クレオパトラ』かについて2ドル賭けるシーン。結果的には1934年度のアカデミー賞作品賞は『或る夜の出来事』となり、クリスティンが賭けに勝ったのだが、そこで約束どおりかかってきたと思った電話の相手は思いがけずキャロル。しかもその内容は、ウォルターと同じようにゴードンの手にかかって殺されたと思われていたキャロルの息子デイビッドが見つかったという驚くべき電話だった。

なぜデイビッドが今になって戻ってきたの？それを聞きとるのはヤバラ刑事だ。デイビッドの供述によれば、デイビッドとウォルターらはゴードンからの勇気ある脱出を試み、ウォルターの助けもあってデイビッドは逃げる事ができたが、ウォルターがどうなったかは知らないとのこと。それを聞いたクリスティンが、息子の行動を誇らしく思ったうえ、デイビッドが生きていたのだからウォルターだって生きていると考え、さらに信念を強くしたのは当然だ。

印象深いラストシーンに注目！

そこで1人外に飛び出したクリスティンが、この映画に再三登場している1930年頃

のロサンゼルス市を見事に再現した風景の中、1人歩いていく姿でこの映画は終了するが、このラストシーンはクリスティンの前向きの姿勢が一層顕著で印象的。そんなラストシーンにおけるアンジェリーナ・ジョリーの静かな熟演に再度注目したい。

もっとも、この映画は実話にもとづく物語。そしてそれによると、クリスティンはウォルターに何が起こったのかを知ることなく、1935年に亡くなったとのことだが、そんな1人の女性が後の人々に残したものは？それは80年後の今、彼女の生きざまがハリウッド最高の女優と監督によって映画化された一事からも明らかだ。生涯愛する息子ウォルターの生存を信じ、ロサンゼルス市の腐敗と闘い続けたクリスティンに敬意を込めて合掌。

2008(平成20)年12月19日記



チェンジリング

(TOHOシネマズ梅田ほかで公開中)

母は強し！ アンジーにオスカーを期待！

期待と不安の中オバマ新政権が船出したが、ハ十年前の米国は？ 経済不況と社会不安は殺人・強盗・誘拐等の犯罪を誘発するが、それに対する警察の対応は？ オバマ政権への国民の信頼は厚いが、当時のロス市警の腐敗と権力の濫用は最悪。一九二八年三月十日に発生したウォルター少年(W)失踪事件を真剣に捜査せず、名乗り出た替え玉を「本人だ」と母

親クリスティン(C)はアンジェリーナ・ジョリーに押しつけたのだが「さらった子供の代わりに妖精が置いていく醜い子供」という伝説をタイトルにした実話に基づく物語における、Wを取り戻すために闘うジョリーの魂の演技は神懸かり的だ。

ロス市警の頑強な再捜査拒否は捜査ミス隠蔽のためだが、それでWの救出が遅れたら誰が責任を

危険人物と目されたCが精神科病院に強制収容されるシーンは悪夢ではなく、腐敗した権力が行う現実の姿。腐敗と闘う長老教会の支援がなければ、一生Cは権力と結託した悪徳医師の監察下。さすがクリント・イーストウッド監督の眼力は鋭い。他方、ゴードン(G)農場では二十余人の少年の死体が発見されたが、脱出した少年の供述によればWはその中の

一人？

後半の焦点はロス市警刷新のための聴聞会と誘拐犯Gの刑事裁判の行方。法曹関係者は社会派・人権派弁護士の追及の鋭さに注目したいが、Cの関心はただ一つWの生死。さてGの証言は？ラストに向けた意外な展開の第一は、死刑執行直前のGからの手紙で実現したCとの面会。「本当に来るとは思わなかった」と言うGに対する「Did you ki

Ilm y son(あなたの息子)を殺したの？」の心の叫びはアカデミー主演女優賞への決定打？

第二は、脱出した一人の少年が五年後警察へ出頭したこと。彼が語る真実とは？。そこから生まれたCの確信とは？。充実感じっぱい二時間十二分、あなたの心にはきつと勇氣と希望が生まれるはずだ。